

# 26PB-am231

薬学研究活動へのモチベーション向上を目的とした初年次教育の効果

○田口 忠緒<sup>1</sup>, 金田 典雄<sup>1</sup>, 岡本 浩一<sup>1</sup>, 能勢 充彦<sup>1</sup>, 丹羽 正武<sup>2</sup> (<sup>1</sup>名城大薬, <sup>2</sup>名城大)

【目的】臨床薬剤師養成に重心をおいた現行の6年制薬学教育において、薬学領域における研究活動にも興味を持たせるために、1年次後期の薬学入門Ⅱ：ヒューマニズムの枠内で「研究活動に求められる心構え：コアカリ A(2)-3」を実施している。今般、アンケート調査を実施することで、本教科の研究活動へのモチベーション向上に対する効果を評価した。

【方法】1) 薬学入門Ⅱ：ヒューマニズム(全7演題)のうち、研究活動に関して「天然物資源を対象とした研究」、「生命科学的な研究」、「製剤技術を対象とした研究」および「漢方薬を対象とした研究」を設定し、各専門分野の教授による1題完結型の講義を行った。2) 毎回の講義終了後には、講義内容に関するレポートを提出させた。3) 2012、2013年度の1年次学生について、全講義終了後の授業評価アンケートを実施して本法の教育効果を調べた。

【結果】1) 入学時に研究職を進路と考えていなかった学生は57%：2013年度および45%：2014年度であった。2) 両年度ともに80%以上が本講義全体の内容は興味深かったと回答し、70%以上が高学年での専門教育に対するモチベーションが向上したと答えた。3) 研究活動の必要性および本学部での研究の多様性について70%以上が理解できたと答えた。4) 両年度ともに半数以上の学生が卒業研究に対するモチベーションが高められたと答えた。

【考察】初年次教育において研究活動へのモチベーション向上を目的とした講義を行うことで、入学後の早い時期に研究への理解・興味を持たせることができた。